

●随想

〈物を詠み込む歌〉と 〈気付きの歌〉

奥村晃作（高7回）

ふるさと飯田を詠む歌

大学生の時代、つまり二十三歳頃から短歌を詠み始めた。本年は七十三歳なので、五十年間、歌を詠み続けてきたことになる。

今から三十年前の一九七九年に第一歌集『三齡幼虫』を刊行、本年三月に十二冊目の歌集『多く日常のうた』を上梓した。

十二冊の歌集で公表した歌の数は五、七九二首。その中から二十首ほどを選び、いくつかの類に分けて紹介させて頂こうと思う。

先ずは、故郷に関わる歌から七首を引く。

飯田市を見下ろす山の恋しもよ風越の峰、
虚空蔵の尾根



●おくむら・こうさく
昭和11年飯田生まれ。同37年東京大学経済学部を卒業して三井物産に入社するも2年で退社。在学中に「コスモス」に入会し、宮柵二に師事。現在、「コスモス」の選者・編集委員、「棧橋」発行人、「江戸時代和歌」編集人。

飯田の市街から北の方向を見上げると、手前に虚空蔵が、その背後に風越山（権現山）が形よく見られる。東中学校在学时、虚空蔵までの全校マラソンに参加したことを思い出す。

大男といふべきわれが甥姪と同じ千円の鰻を待つ

飯田市知久町の丸井亭で鰻を食べた折りの歌。甥姪は小学生の低学年の頃であったか。

ふるさとの訛なつかしあたたかし

「ソイダモンデナア」とか「アバヤ」とか言い

飯田下伊那地方の方言はやさしく、あたたかい。以下に、方言を入れて作った歌の中から三首を上げておく。

「帰りには家にお寄りて」

「市田柿、干し芋で茶をおあがりなんしよ」

トランプのばば抜き一緒にやらまいか、
炬燵囲んで蜜柑を食べて

「はいじゃまあ、わしは帰るにおみやげの
塩イカ下げてわしは帰るに」

次は、中央道高速バスにて飯田に帰省の折の歌。

運転手一人の判断でバスはいま

追越車線に入りて行くなり

車中ずっと本を読んでいたが、しばらく外を眺めることとした。たまたまその時バスがスピードを上げ、追越車線に入り、前の車を抜き去った。一瞬不安が萌した。四十名の乗客を乗せたバス。その命を預かる運転手。皆に相談もなしに彼は自由に車を運転するわけで、巧く言えないが、その折の思いを歌にした。

物を詠み込む歌

先ずは、人工の物として、石鹼・ボールペン・吸殻を詠んだ歌を順に上げる。

掌を滑りタイヤを打ちて己れ跳び身を隠したり固き石鹼
掌に握り、体を洗っていた石鹼が突然掌から滑り出て

何回か弾んで、どこかに身を隠し、見えなくなってしまう。探すと坐っていた椅子（台）の下にあった。よくあることだが、ある折に心が動き、そのままに詠みあげた。次のボールペンの歌はよく知られているが、その理由は自分でもわからない。

ボールペンはミツビシがよくミツビシの
ボールペン買ひに文具店に行く

ある折、このボールペンは本当に書きよいと思った。書き比べたわけではないが、一応色々使ってみてこれが一番書きよいと確信した。その思いの表現がこの歌となった。

これ以上平たくなれぬ吸殻が駅の階段になほ踏まれをり
たまたま目にした光景。心が動き、そのままに詠んだ。
その事をどう思うかは、歌わない。わたしはそういう歌の作り方である。

次に、動物を詠んだ歌から三首上げておく。

船虫の無数の足が一斉に動きて船虫のからだを運ぶ
夏の海。大小の石が転がる岩場を渡り歩く折、船虫が一
斉に散り走った。その一匹に目を止める形に詠みあげた歌。
船虫が全力で走るとき、彼の無数の足は一斉に激しく



「ニッポン全国短歌日和」(NHK・BS2、2009.4.25)より

動く。目の前の光景を観察して表した。更に、無数の足がその上にある体全体を運ぶ。これまた観察に基づく事実の表現であるだろう。

フラミンゴ一本の脚で佇ちてをり一本の脚は腹に埋めて

どこで見たのか覚えはないが、これも見たままの姿を表した歌である。たぶんもう一本の足が一瞥(いちべつ)して見当たらぬ事に心が動き、その感動を表した歌であつたらう。よく見たらもう一本の足は腹の羽毛に隠れてうずまつて

いて、一見しただけでは見えなかつたのである。

犬はいつも

はつらつとして

よろこびに

からだふるはず

凄き生きもの

これもすつかり

昔のこととなる

が、小学生の息子

が拾ってきた雑種

の犬。長じて大き

くなつた。シェパードの雑種であつた。いつも元氣はつらつ。ものを食う時も一氣に平らげて凄かつたが、散歩に出かけようとすると折は体中ふるわせてその喜びを表した。無心、邪氣がないのである。

もう一首、影を詠んだ歌もこの範疇に加えておこう。

轆(ひ)かるると見えしわが影自動車

車体に窓に立ち上がりたり

自分の分身の影であろうとも、自動車に轆(ひ)かれるのはいやなものである。道幅も狭く一瞬避けようもなかつた。と思つたとき、わが影は自動車の車体に、窓に立ち上がり、その表面を移動して、車輪の下に轆(ひ)かれることはなかつた。そんな経験を歌に詠んだ。

気付きの歌

わが歌の一番の手柄はおそらくこの「気付きの歌」にあるだろう。ざっと数えて十首余りあるが、紙幅の範囲で紹介させて頂く。

まず多分、わたしの歌の中で一番有名な次の歌。

次々に走り過ぎ行く自動車の運転する人みな前を向く

ある折に、わたしはそのことに気付いたのであつた。

運転席に坐り、車を運転をする人が前方を見つめていることに。念のためしばらくの間、走行の車を確かめてみた。トラックもタクシーも乗用車も、みな運転する人は前方を見つめている。自らの気付きに確信を得て、その感動を歌の形に表した。

自動車関連の歌をもう一首引く。

信号の赤に向かひて自動車は次々止まる前から順に

交差点での囑目詠。「前から順に」が効いていると思う。

ラッシュの車内で押し合いながら、ふと思ったことを歌に表した。

もし豚をかくの如くに詰め込みて

電車走らば非難起こるべし

その光景を想像しただけでも納得がいくはず。お互いに人間だから文句も言わずに通勤地獄を受け入れている。絶対とか完全とかは普通はないはずなのに、音楽に関してはその事があるのである。

不思議なり千の音符の

ただ一つ弾きちがへてもへんな音がす

自分はクラシックギターをたしなむが、三分間位の曲

を暗譜して弾くことがある。音符の数はとても千では収まらないだろう。一音違ってもその音は間違いで、変な音。駄目である。つまり、音楽においては完全が、絶対が求められる。そのことが不思議でしよがなかつたが、今は納得する。コンピュータのデジタル世界がまさにこれだ。一字違えばすべて駄目。

一時期、東京でビルやレジデンスがどんどん建てられた折、わたしは水洗便所の増大を怖れた。まかなう水があるのかと思った。

一回のオシッコに甕一杯の水流す水洗便所恐ろし

一体このような水の使い方が許されるものかと、怖れの思いの表現でもあった。

どこまでが空かと思ひ 結局は

地上スレスレまで空である

グラウンドのベンチに坐り、青い空を眺めていた。そのまま視線を下ろした。その時ふと思った。どこまでが空かと。樹の先、家の屋根……地上スレスレまで、と気付き、確信し、歌にまとめた。

(注・第七歌集『男の眼』から新かなの表記に変えました。それ以前前の歌は旧かなの表記となっております)